

教育研究業績書

2023年10月23日

所属：看護学科

資格：助教（臨床）

氏名：福井 美苗

研究分野	研究内容のキーワード
小児看護学, 家族看護学	意思決定, 移行期支援, 相互作用
学位	最終学歴
修士(看護学)	大阪大学大学院医学系研究科保健学博士前期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. Google Meetを使用した学生と教員の双方向型の実習	2020年5月2020年8月	<p>武庫川女子大学看護学部実習科目「小児看護学実習」（専門科目、3年次後期～4年次前期配当、必修2単位）で実施した。コロナ渦の影響により臨地での実習が不可能になったことから、Google Meetを用いて、シミュレーション実習を行うこととした。</p> <p>1グループにつき、助教2名体制で実習を行い、事例の看護展開のいては、教員・医療スタッフ役と、患者・家族役に役割分担をした。実習開始までに、履修登録をしている学生をグループの指導用、個人指導用、病室用のGoogle Meetに招待し、ナースステーションと病室を想定した遠隔実習を行った。学生それぞれに事例を割り当て、学生は看護計画を立案し、教員役の教員から指導を受け、患者役の教員を相手に看護援助を実施した。本取り組みを行った学生の実習の学びは、臨地実習に行った学生の実習の学びと同じ内容が挙げられており、遠隔においても質を担保した実習を行うことができた。</p>
2. 小児病棟を再現した部屋でのシミュレーションの実施	2020年5月	<p>武庫川女子大学看護学部実習科目「小児看護学実習」（専門科目、3年次後期～4年次前期配当、必修2単位）で実施した。コロナ渦の影響により臨地での実習が不可能になったことから、Google Meetを用いて、シミュレーション実習を行うこととした。学生が小児病棟の病室を想起しやすいように、看護科学館母性・小児実習室内に模擬病室を再現した。学生がGoogle Meet上で患者の療養環境及び行動・表情がよく見えるよう、患者・家族役の教員はカメラ位置を調整した。本取り組みで学生は遠隔でも患者の言動および療養環境を観察することができ、患者の状態に合わせた個別性の高い看護計画の立案。実施、評価をすることができた。</p>
3. 視聴覚教材を用いた学習	2020年5月	<p>武庫川女子大学看護学部実習科目「小児看護学実習」（専門科目、3年次後期～4年次前期配当、必修2単位）で実施した。コロナ渦の影響により臨地での実習が不可能になったことから、Google Meetを用いた遠隔実習を行うこととした。プリパレーションの学習については、インターネット上で公開されている動画等を画面共有機能を使用して見せ、内容や方法についての復習を行った。フィジカルアセスメントに関しては、DVD教材を画面共有機能を使用して見せ、復習を行った。看護過程の事例に関しては、紙ベースでの事例の配信前に、DVD教材を見せ、学生が子どもの発達段階を理解しやすいように工夫した。</p>
4. Google Formを用いた双方向性の授業展開	2020年4月	<p>武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅰ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）で実施した。本授業内容を動画配信した際に、Google Form（アンケート作成アプリケーション）を用いて2、3問の小テストおよび授業の学びや感想について毎回記載を求めた。Google formを用いることにより、授業動画を配信するだけの能動的な授業ではなく、学生も授業内容についての意見を出せる機会を設けることができた。学生からの質問に対して、Google Classroomの限定コメ</p>

教育上の能力に関する事項				
事項	年月日		概要	
1 教育方法の実践例				
5. Google Classroomを用いた授業動画の配信	2020年4月		<p>ントを通して返答することで、双方向の授業展開を行うことができた。</p> <p>武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅰ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）で実施した。コロナ渦の影響により対面授業が不可能になったことから、授業動画を配信することとした。履修登録をしている学生をGoogle Classroomに招待し、その中で授業に関する動画や資料を配信した。授業動画は、パワーポイントの録画機能やXsplitを用いて作成した。</p> <p>Google Classroomは、パソコンやスマホ、タブレットなどインターネットに接続可能なデバイスであれば視聴可能であり、各学生が自宅にいながら授業を見ることができるよう配慮を行った。本取組みにより、外出自粛要請期間でも質を担保した授業の提供を行うことができた。</p>	
6. Google Classroomを用いた連絡や課題提出	2020年4月		<p>武庫川女子大学看護学部実習科目「小児看護学実習」（専門科目、3年次後期～4年次前期配当、必修2単位）で実施した。コロナ渦の影響により臨地での実習が不可能になったことから、Google Classroomを開設し、その中で連絡事項や患者事例、実習記録（Googleドキュメント）を配信し、学生は期日までに記録を提出することとした。学生はパソコン、スマホ、タブレットなど様々なデバイスを使用していたため、実習記録の提出は配信したドキュメントと、配布済みの紙ベースの記録の画像のどちらでも可能とし、学生が課題に取り組みやすいように留意した。Google Classroomを使用することで、遠隔でもすぐに教員が実習記録を見ることができ、リアルタイムな看護過程の指導ができた。</p>	
2 作成した教科書、教材				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
1. 学習支援ボランティア「ふでばこ」への参加	2021年11月～現在		外国にルーツを持つ子どもたちへの学習支援ボランティア「ふでばこ」に参加している。	
2. 西宮市保健所業務支援活動	2021年8月2022年2月		西宮市の保健所にて、新型コロナウイルス感染者への積極的疫学調査、安否確認の電話対応の支援活動を行った。	
3. 武庫川女子大学 小児看護実習 助手	2019年5月2020年3月		小児看護実習指導	
4. 神戸大学 小児・家族看護実習 補助	2014年11月2014年12月		小児・家族看護実習指導	
4 その他				
職務上の実績に関する事項				
事項	年月日		概要	
1 資格、免許				
1. 保健師	2014年4月22日～現在			
2. 看護師	2014年4月22日～現在			
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
4 その他				
研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 小児の入院がきょう	単	2016年3月	大阪大学大学院 医	子どもの入院中にきょうだいを世話する人の視点から、きょうだい

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
だいに及ぼす影響-世話する人からみたきょうだいの行動と感情の変化- Children's Behavioral and Emotional Changes During Their Sibling's Hospitalization-Caregiver's Perspective-			学系研究科博士前期課程 保健学専攻, 修士学位論文	の感情と行動の変化と家族の属性・背景との関連を明らかにすることを目的とし、無記名自記式の調査を行った。統計解析より世話人から見たきょうだいの感情と行動の変化の要因を明らかにした。自由記述ではきょうだいの様子と世話する人が努力していることについてカテゴリを抽出した。きょうだい支援について、多角的なアセスメントの必要性、継続的な病状理解への支援について示唆を得た。
3 学術論文				
1. オンラインでの小児実習モデル人形を用いた小児看護学実習に対する学生の意見	共	2022年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 7, 37-47	オンラインで小児看護学実習を行った学生の意見を、小児実習モデル人形を用いたオンライン実習で学んだことについて明らかにすることを目的に、学生6名に半構造化面接調査を行い、内容分析を行った。学んだこと・できたことは45コードあり、【患児と家族に対するコミュニケーションの方法を学べた】【声や動き、カルテの情報で患児の反応をつかめた】など12カテゴリに分類された。困難に感じたこと・できなかったことは41コードあり、【バイタルサインの測定や日常生活援助が経験できなかった】【人形なので患児の表情や症状が観察できなかった】【目線を合わせることが難しかった】など15カテゴリに分類された。共著名：北尾美香, 福井美苗, 植木慎悟, 藤田優一
2. 小児科の診療所で勤務する看護師の教育のニーズに関する調査	共	2022年2月	外来小児科, 25 (1)	小児科の診療所で勤務する看護師の教育ニーズを明らかにすることを目的に、全国の小児科を標榜する診療所の看護師を対象にアンケート調査を行い、56施設より有効回答を得た(有効回答率11.2%)。その結果、対象の診療所での経験年数の平均は5.2年と比較的長かったが、現在の診療所で勤務するまで小児看護の経験がない看護師が半数以上いることが分かった。また、小児看護に関する知識や技術について学びたい内容として、アレルギー、予防接種、育児支援などが多く挙げられた。共著名：藤田優一, 植木慎悟, 北尾美香, 福井美苗
3. 小学4~6年生の唇顎口蓋裂患児の病気に対する思い(査読付き)	共	2021年12月	日本看護科学会誌, 41, 824-831	小学4~6年生の唇顎口蓋裂患児の病気に対する思いを明らかにする。2018年8月~9月にA病院に通院または入院中の小学4~6年生の唇顎口蓋裂患児11名を対象に、病気に対する思いについて半構造化面接を行い、質的記述的研究手法を用いて分析を行った。病気に対する思いは29コードが抽出され、8カテゴリ【生まれたときに自分の口の形や骨がないことを知り驚いた】【自分の歯や人中がないことを聞いても驚かなかった】【自分の病気は歯が生えないことを改めて実感する】【どうして病気になるんだろう】【病気は治るのかな】【自分の病気は知っておくほうがいい】【病気は他人にはわからないから気にしていない】【重く考えすぎないように普通にふるまったほうがいい】に分類された。具体的操作期になり、患児が自分の病気を実感を伴って理解し、そして病気について悩みを抱くことが明らかとなった。患児の病気の理解を深められるように、説明することの重要性が示唆された。共著名：北尾美香, 熊谷由加里, 池美保, 植木慎悟, 福井美苗, 藤田優一
4. 新型コロナウイルス感染症の拡大による小児の入院環境の変化とその対応策に関する実態調査	共	2021年11月	日本小児看護学会誌	新型コロナウイルス感染症の感染拡大による小児の入院環境の変化と対応策を明らかにするため、全国の小児が入院する病院352施設を対象に横断調査を行った。61施設より回答があり(回答率17.3%)、病床利用率は68.2%から54.6%に低下していた。その理由は「感染症患者(新型コロナウイルス感染症以外)が減少した」が92.5%と最も多かった。プレイルームの利用規則を変更した施設は62.3%であり「使用禁止」や「使用人数の制限」などの変更がされていた。付き添い率は72.6%から65.0%へ低下していた。面会基準は、「親以外は不可」が60.8%と最も多く大きな変化がみられた。入院環境の問題として「面会の制限」、「付き添い者の交代制限」が多く、対応策としてリモート面会や運用マニュアルの作成などが

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
5.Children's psychosocial and behavioral consequences during their siblings' hospitalization: A qualitative content analysis from caregivers' perspectives	共	2021年9月14日	Journal of Clinical Nursing. 2021, 00, 1-8	<p>行われていた。感染対策と子どもの権利擁護、付き添い者の負担軽減ができる対応策がとられていた。(藤田優一、植木慎悟、北尾美香、福井美苗)</p> <p>本研究は、入院中の子どものきょうだいが経験する心理社会的・行動的な影響を、介護者の視点から包括的に記述することを目的としています。本研究では、COREQガイドラインに沿って、入院中の子どもの兄弟の介護者147名の視点を記述するために、質的内容分析を採用した。2015年1月から3月にかけて、日本国内の33の医療機関から、自由形式の質問を用いた調査票を用いてデータを収集した。13の包括的なカテゴリーからなる4つのテーマが抽出された: 1) いつもの自分を維持すること、2) 内在化の困難、3) 外在化の困難。4) 自己成長 データ分析の際には、価値判断を避け、ポジティブな視点とネガティブな視点に分けることに重点を置いた。中立的なデータ分析により、兄弟が行う心理社会的・行動的な調整を説明することができました。</p> <p>行動の調整を説明することができた。臨床現場との関連性 本研究の結果は、医療従事者、教師、家族を教育するために使用することができます。本研究の結果は、入院患者の兄弟に対する入院の心理社会的・行動的影響について、医療従事者、教師、家族を教育するために利用できる。</p> <p>本研究の結果は、医療従事者、教師、家族に対して、入院している子どものきょうだいに対する心理社会的・行動的影響について教育し、心理社会的葛藤を抱えているきょうだいが心理社会的葛藤に悩む兄弟が必要な支援を受けられるようにするために活用できる。(Kazuteru Ninomi, Minae Fukui)</p>
6. 新型コロナウイルス感染拡大下における遠隔と対面を組み合わせた授業方法に対する学生からの評価	共	2021年9月	日本が看護化学学会誌, 41, 148-154	<p>1年次後期専門教育科目「小児看護学概論」におけるオンデマンド型授業、ライブ型授業、対面授業の各授業方法についてアンケート用紙を配布し、評価の差異および意見について検討した。66名より回答があり、3つの授業方法で理解度や満足度に有意差はなかった。来年度からどのような授業形態がよいかについては、遠隔授業を中心とした授業形態がよいと回答した学生が3分の2を占めていた。科目の特性によって遠隔授業と対面授業を使い分けることで、より効率的な学習が可能となることが示された。</p> <p>共著者名: 藤田優一, 植木慎悟, 北尾美香, 福井美苗</p> <p>予防接種を受ける0~6歳の注射時の痛みを軽減するため、振動刺激装置であるBUZZY®の有効性を無作為化比較試験にて検討した。118人を分析対象として分析した結果、親の評価では有意差が得られたものの、盲検化した評価者の評価では有意差が得られなかった。子どもの年齢が若い、もしくはBUZZY®自体が苦手な子どもは有意に痛みを表出することがわかった。</p> <p>本人担当部分: 論文内容の妥当性 担当ページ: 共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名: Ueki S, Matsunaka E, Takao K, Kitao M, Fukui M, Fujita Y.</p>
7. The effectiveness of vibratory stimulation in reducing pain in children receiving vaccine injection : A randomized controlled trial. (査読付き)	共	2021年3月13日	Vaccine. 2021, 39(15): 2080-2087.	<p>共著者名: 藤田優一, 植木慎悟, 北尾美香, 福井美苗</p> <p>予防接種を受ける0~6歳の注射時の痛みを軽減するため、振動刺激装置であるBUZZY®の有効性を無作為化比較試験にて検討した。118人を分析対象として分析した結果、親の評価では有意差が得られたものの、盲検化した評価者の評価では有意差が得られなかった。子どもの年齢が若い、もしくはBUZZY®自体が苦手な子どもは有意に痛みを表出することがわかった。</p> <p>本人担当部分: 論文内容の妥当性 担当ページ: 共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名: Ueki S, Matsunaka E, Takao K, Kitao M, Fukui M, Fujita Y.</p>
8. Related Variables of Behavioral and Emotional Problems and Personal Growth of Hospitalized Children's Siblings: Mothers' and Other Main Caregivers' Perspectives	共	2018年1月1日	INQUIRY: The Journal of Health Care Organization, Provision, and Financing Volume 55, 1-10	<p>本研究は、きょうだいが入院している子どもの心理的な問題と成長を変数にし、母親と子どもを世話する人の視点から調査したものである。母親と世話する人を対象にChild Behavior Checklist/4-18日本語版と入院児のきょうだいの人格的成長尺度を使用した。それぞれの尺度の得点を従属変数とし、重回帰分析を行った。母親の得点からは、きょうだいの入院による環境の変化が関連していることが分かった。世話する人の得点からは家族の人口学的統計の関連が示唆された。独立変数ときょうだいの心理的変化の関連には、母親の視点と世話する人の視点では違うことが示唆された。共著者名: Ninomi K, Fukui M</p>
9. こどもの長期入院に伴う家族役割の変化によるストレスコーピング	共	2016年3月20日	日本小児看護学会誌25巻1号, 29-35	<p>家族を1つのシステムユニットとして捉え、こどもの長期入院に伴う家族役割の変化から生じる家族ストレスと家族のストレスコーピング行動を明らかにすることを本研究の目的とし半構成面接を実施した。その結果、こどもの長期入院による家族役割の変化に伴う家族</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				<p>のストレス要因、それから生じるストレスに対処するための家族のコーピング行動としてそれぞれ7つのカテゴリが抽出された。長期入院することもその家族を支援として、家族がもつストレス要因を除去・軽減させることや家族のストレスコーピング行動を促す支援が示唆された。</p> <p>共著名：福井美苗、本田順子、法橋尚宏</p>
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 慢性疾患をもつ移行期患者の意思決定能力を高めるために小児看護専門看護師が実践している看護	共	2022年7月10日	日本小児看護学会第32回学術集会	<p>意思決定は重要な思春期の発達課題であるといわれている。こどもの意思決定能力は、こどものセルフケアと同様に、小児期には養育者の補完が必要であるが、成長発達と共に成熟していく。しかし、先天性心疾患を持ちながら成人になった患者の意思決定能力が成熟しておらず、親が患者の治療上の意思決定を継続している症例報告もある。そこで、小児看護専門看護師（以下、小児看護CNS）が実践する、小児期発症の慢性疾患をもつ患者への意思決定支援を明らかにすることを目的とし、現在病院で勤務している小児看護CNSを対象とし、研究参加に同意を得られた対象者に、どのような意思決定支援を行っているかなどについて、半構成的面接を実施した。10名の小児看護CNSに面接を行った。312コードが抽出された。カテゴリは「成人科への移行やセルフケアの獲得について、患者の意思や想いをしっかりと聞く」、「患者が病気のことを自分のことだと思えるように関わる」、「患者の自己管理において少しずつできることを増やしていく」、「患者が自身の病気や症状、困ったことを誰かに伝えられるようにする」など14日カテゴリが分類された。患者の意思決定能力を高めるために、「患者の治療やセルフケアに対する自己効力感を高める」といった患者のセルフケア能力の向上や自立を促す支援が行われていた。また小児看護CNSは、意思決定支援を行う中で患者と保護者の関係性をアセスメントしながら、保護者に患者を見守るように関わるよう支援し、セルフケアや意思決定の主体を患者へ移行していく支援を行っている。共著名：福井美苗、小笠原史土、北尾美香、藤田優一</p>
2. 思春期の1型糖尿病患者のセルフケアへの親の関わりが及ぼす効果に関するレビュー	共	2021年12月4日	第41回日本看護科学学会	<p>【目的】コントロールが難しいとされる思春期1型糖尿病患者のセルフケアに対する親の関わり効果を検討することを目的にHbA1cを指標とした研究のレビューを行った。【背景】1型糖尿病は主に小児期に発症する糖尿病で、インスリン療法が主な治療方法であり血糖値のコントロールが予後を左右する。薬剤、血糖値管理、食事、運動等のセルフケアが重要である。子どものセルフケアの獲得には心身の成長発達を基盤に知識の習得や動機付けの支援が必要となる。親の関わりがセルフケアを促進するとされるが、思春期の自立の時期にセルフケアによる疾患のコントロールが難しくなるといわれる。親の関わり効果は多様に報告され、総括した報告は見当たらない。そこで1型糖尿病のセルフケアに対する親の関わり効果として、重要なコントロール指標のHbA1cに着目し先行研究の現状を調べた。【倫理的配慮】文献の引用の際は出典を明記した。【方法】CINAHLとMEDLINEより思春期、小児、家族、親、親子関係、糖尿病に関連したキーワードで絞込み各190件、286件の論文のうち重複を除き2000～2020年に出版された論文を、抄録を確認し、原著論文16件を分析対象とした。【結果】定量的研究は15件質的研究は1件。クロスセクショナル研究10件。介入研究5件。長期の前向き研究は1件。対象の年齢は9～18歳、対象数は10～252人。近年の研究では介入研究が増加傾向にあった。親の関わりに関する尺度として家族機能や親による管理、家族間葛藤などが用いられていた。HbA1cのコントロール不良は本人の低いセルフケアや低い家族機能と相関があると論文がある一方、親の関わりの一貫性は子どものHbA1cに対して有意な関連がないとする研究があった。【考察】論文全体より、親による関わり効果は明確ではないと考えられたが、家族による影響を示唆する論文が多かった。（山口未久、福井美苗、本田</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
3. オンラインで小児看護学実習を受講した学生の意見－第2報：できなかったこと－	共	2021年12月4日	第41回日本看護科学学会	<p>順子)</p> <p>【目的】 オンラインで小児看護学実習を受講した学生の意見のうち、「できなかったこと」の内容を明らかにする。【方法】 A大学看護学科4年生のうち、2020年6月～7月に小児看護学実習をオンラインで受講した学生10名に、オンライン実習でできなかったことに関して半構造化面接調査を行った。逐語録を作成し、内容分析を行った。オンライン実習では、4歳・女兒・喘息の事例を作成し、教員2名体制で行った。実習室に模擬患者（人形だが声や動きは教員A）と母親役（教員A）、別室に指導役（教員B）を設置した。LMSのクラスルームを用いて、事例の配布や課題の提出を行った。遠隔会議アプリMeetで会議室を3つ作成し、①病室・②行動計画発表・③控室と分け、学生は行動計画の発表や病室訪問時にはそれぞれの会議室に移動し、看護展開を行った。【倫理的配慮】 倫理委員会の承認を得た。【結果】 6名の学生が回答した。オンライン実習でできなかったことは記録単位が43件あった。「母親ではなく教員だと思ふときがあり、やりにくかった」「バイタルサインの測定や日常生活援助が経験できなかった」「人形なので患児の表情や症状の観察ができなかった」「患児に直接触れることができなかった」「看護師の手技が見られなかった」「1人の教員が複数の患者役をしていたので、病室を訪室できる時間が短かった」「目線を合わせるのが難しかった」「学生や教員と話す機会が少なかった」「病室をイメージしにくかった」「患児が協力的でないときの対応が学べなかった」「病院実習の経験が少ないことが不安である」「看護師への報・連・相が学べなかった」など16カテゴリに分類された。【考察】 オンラインでの非言語的コミュニケーションにおける限界が多く分類された。また、病院での看護の実際や患者の療養環境を学べる方法については、実習病院に協力を依頼し検討する必要がある。（福井美苗、北尾美香、植木慎悟、藤田優一）</p>
4. オンラインで小児看護学実習を受講した学生の意見－第1報：学びとできたこと－	共	2021年12月4日	第41回日本看護科学学会学術集会	<p>【目的】 オンラインで小児看護学実習を受講した学生の意見のうち、学びとできたことの内容を明らかにする。【方法】 A大学看護学科4年生のうち、2020年6月～7月に小児看護学実習をオンラインで受講した学生10名に、オンライン実習での学びとできたことに関して半構造化面接調査を行った。逐語録を作成し、内容分析を行った。オンライン実習では、4歳・女兒・喘息の事例を作成し、教員2名体制で行った。実習室に模擬患者（人形だが声や動きは教員A）と母親役（教員A）、別室に指導役（教員B）を設置した。LMSのクラスルームを用いて、事例の配布や課題の提出を行った。遠隔会議アプリMeetで会議室を3つ作成し、①病室・②行動計画発表・③控室と分け、学生は行動計画の発表や病室訪問時にはそれぞれの会議室に移動し、遠隔で看護展開を行った。【倫理的配慮】 研究者の所属大学の倫理委員会の承認を得た。【結果】 6名の学生が回答した。オンライン実習での学びとできたことは記録単位が45件あり、小児看護学実習に関連するカテゴリは「子どもと家族に対するコミュニケーションの方法を学べた」「小児病棟の療養環境をイメージできた」「人形や教員を患者や母親と自然に思うことができた」「声や動き、カルテの情報で患児の反応をつかめた」「子どもと家族の両方を看護する必要性を学んだ」「成長発達や疾患について理解できた」の6カテゴリ、小児看護学実習以外にも関連するカテゴリは「人形でも返事をするので普通に話せるようになった」「緊張しないでできた」「自分で情報取得する項目を考えることができた」「自分のペースで学習できた」など6カテゴリに分類された。【考察】 学生はオンラインでも人形の声や動き、文字情報により患児の反応をとらえ、コミュニケーションの方法を学べていた。また、家族への看護の必要性についても学ぶことができていた。（北尾美香、福井美苗、植木慎悟、藤田優一）</p>
5. 15th International Family Nursing Conference	共	2021年6月30日	International Family Nursing Conference	<p>MEDLINEとCINAHLにより検索をした。以下のシソーラスにより検索した。採用基準は1)英語で書かれている2)2000年以降に発行されたものである3)慢性疾患をもつ思春期のこどもである。除外基準は1)精神疾患をもつ2)学術論文出ない。個人で採用・除外をスクリーン</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
6. 慢性疾患をもつ思春期患者の意思決定の実態 患者と保護者の相互作用に焦点をあてて	共	2021年3月6日	第1回理論看護研究会	<p>グした。親子関係の中で行われる意思決定は、こどもの疾患、重症度、意思決定における責任が誰なのか、親の不安、家族の社会経済的状況に関連する。疾患の有無と家族の社会経済的状況はこどもの意思決定の欲求を遅らせることになるという報告がされている。多くの論文は、こどもと親と医療者による共同意思決定を推奨しているが、こどもと親は共同意思決定よりも受動的な意思決定を好むという報告もある。身体的・心理的・経済的・社会的な家族の問題は、思春期の意思決定に影響を与える。医療者は思春期のこどもの意思決定能力をアセスメントを、家族員の背景・家族の心理的と社会経済的な状況、親子の関係性からアセスメントする必要がある。(Minae Fukui, Junko Honda, Ikuko Miyawaki)</p> <p>こどもの意思決定能力の獲得は移行期時期である思春期の重要な発達課題とされており、これは小児期発症疾患を持つ患者も同様である。しかし、慢性疾患を持ちながら移行期を迎えた患者の中には、意思決定能力が成熟していない患者の症例が報告されている。こどもは成長発達している存在であり、こどものセルフケアも発達途上にあるために、こどもが必要とするセルフケアは療育者の補完が不可欠である。そして、療育者の補完はこどものセルフケア能力と行動の変化に応じて徐々に減少し、最終的にはこどもにとって補完される必要であるケアを必要としない生活が確立される。セルフケア能力には自身の意思決定能力が必要であると考えた。つまり、こどもの意思決定能力の発達、こどものセルフケアに影響を及ぼす。発達途上では療育者の補完が必要となり、最終的には療育者の補完を必要とせずこども自身の意思決定が確立される。そこで本研究は、こどもの意思決定能力が発達していく過程、および、こどもの意思決定における療育者の補完が減少していく過程を明らかにすることを目的とした。インタビューにより調査した。分析は質的帰納的分析を用いて分析した。こどもは保護者との相互作用の中で、セルフケアの発達をさせていき、同時に意思決定能力の発達もさせていると考える。(福井美苗, 本田順子, 宮脇郁子)</p>
7. Parent-child interactions in self-care acquisition of child with chronic condition: A systematic review	共	2020年2月	The 6th International Nursing Research Conference	<p>慢性疾患を持つこどもがセルフケア獲得の際に生じる保護者とこどもの相互作用についてシステマティックレビューにより明らかにすることを目的とした。多くの文献は思春期のこどもと保護者を対象としたものであった。慢性疾患をもつこどもは自身の活動や家族の社会的活動の中でセルフケアの獲得を行っていた。保護者の方は、自身が不快に思えよう状況において、こどもの苦痛を最小限にすることに努めていた。医療者は保護者とこどもの関係性を理解した上で、こどものセルフケア獲得の支援を行うべきであると示唆された。</p> <p>共著名: Junko Honda, Minae Fukui, Miku Yamaguchi, Hitomi Katsuda, Tomoko Yamaguchi, Ikuko Miyawaki</p>
8. The Effect of Siblings Hospitalization on Japanese Children's Personal Growth and Behavioral and Emotional Difficulties from Caregiver Perspective	共	2015年3月15日	19th East Asian Forum of Nursing Scholars	<p>本邦におけるきょうだいが入院している子どもの成長・行動と感情の問題に家族の属性・背景との関連を、子どもを世話する人の視点から明らかにすることを目的とした。世話する人に家族属性とChild Behavior Checklist/4-18日本語版と入院児のきょうだいの人格的成長尺度を使用したアンケート調査を行った。重回帰分析を行った結果、きょうだいの入院期間・きょうだいとの接触頻度・母親との分離体験・子どもの誕生順に関連がみられた。それぞれの子どもの心理状況を母親と世話する人の両者から情報を得てアセスメントする必要があると示唆された。</p> <p>共著名: Minae Fukui, Kazuteru Niinomi, Yuka Ikegami, Wataru Kiwado, Yuichi Nakayama, Yuko Takashima, Akemi Yamazaki, Chieko Fujiwara</p>
9. Family stress and coping associated with family-role shift during the long-term hospitalization of	共	2014年5月25日	35th International Association for Human Caring Conference	<p>”子どもの長期入院は家族の日常生活や機能に影響する。特に母親が付き添い入院をした場合は特に影響がある。本研究は母大矢が付き添い入院をし、子どもが長期入院した際に起こる家族の役割の変化とそれに伴うストレスとその対処法について明らかにした。半構成的面接を行い、10家族(16人)に調査を実施した。家族の役割の変化には34カテゴリーが抽出された。家族は子どもの長期入院という</p>

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
a child				状況の中、家族のストレスを軽減させるために家族と過ごせる時間を多く作るように心がけていた。医療者は家族が少しでも一緒に過ごせるように柔軟な支援を提供する必要がある。 共著名:Minae Fukui, Junko Honda, Akira Hayakawa, Naohiro HoHashi”
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 感染対策と子どもの権利擁護、親の負担軽減の両立を目指した入院ガイドラインの開発	共	2022年4月～2025年3月	科学研究補助金「基盤研究C」	新型コロナウイルス感染症の拡大によって、小児病棟では親の付き添いの制限、面会禁止など子どもの権利が擁護されていない状況がある。また、親が付き添う際には、睡眠がとれない、食事がとれないなど親の負担は大きい。本研究では3段階の研究を通して、看護師長よりコンセンサスの得られた「子どもの権利擁護や親の負担軽減と両立できる感染予防策」および、親が賛同する「子どもの権利擁護や親の負担軽減と両立できる感染予防策」を明らかにする。これらの研究結果をもとに『感染対策と子どもの権利擁護、親の負担軽減の両立を目指した入院ガイドライン』を開発する。共同研究者：藤田優一（研究代表者）、北尾美香、福井美苗、小笠原史士、植木慎悟
2. 2021年度ニッセイ財団児童・少年の健全育成実践的研究助成（2年助成研究）	共	2021年8月～2023年7月	テーマ：UR団地での多文化共生の多面性プログラム提供と指導者育成：助成金3,510千円（2021年度1990千円、2022年度1500千円）	武庫川団地を研究フィールドとして、当該団地の外国人家庭の子どもを中心に、そのQOL(Quality of Life)及び社会的包摂の度合いが、現状より高まる状況を目指すことを目標とする。健康、芸術、食育、街づくりの視点から、外国人家庭の子どもに対する学習指導ボランティア「ふてぼこ」を通して、多面的な介入を行う。共同研究者：藤田優一（研究代表者）、大坪明、堀江正伸、藤井達矢、脇本景子、加藤丈太郎、小笠原史士、工藤大祐、福井美苗
3. 看護師が行う慢性疾患を抱える移行期患者への意思決定支援の実施状況調査	単	2020年9月11日～2023年3月31日	日本学術振興会科学研究費助成事業研究活動スタート支援	慢性疾患をもつ子どもの移行期支援は早急に確立するべき課題である。その中でも意思決定支援は、病院施設により質にばらつきがあり、有用性の認められた支援方法が確立されていない。本研究は第一研究で、意思決定支援の実施内容とその必要性、促進要因、阻害要因を明らかにする。第二研究では、意思決定支援に必要なと考える支援の程度とその実施状況の差異、看護師特性および病院・診療所特性による関連性を明らかにする。これらにより、実践的かつ具体的な移行期患者への意思決定支援の方略、病院・診療所の特性や看護師の特性によって生じる意思決定支援の質の格差の縮小、シームレスな成人医療への移行が可能になると考える。
4. 慢性疾患をもつ子どもを含む家族の役割移行を支える多職種協働プログラムの開発	共	2019年4月1日～	日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(B)	障害や疾患をもつ子どもは成長発達に伴い、保護者が担っていた健康・療養管理や治療・療養に関する意思決定という役割を子ども本人へと移行する過程を経験する。本研究では、子どものみ、保護者のみに焦点を当てるのではなく、子どもと保護者（家族員間）の相互作用に注目し、その相互作用が子どもの成長発達や家族の成長発達とともにどのように変化していくのかを学術的に明らかにした上で、子どもを含めた家族を一体として捉えた支援を明らかにする。それに加え、既存の介入研究成果を統合し、各職種の役割を明確化した上で、エビデンスに基づいた多職種協働の支援プログラムを開発することを目指す。（本田順子、勝田仁美、山口未久、栗野宏之、宮脇郁子、山口智子、福井美苗）
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			
1. 2021年4月～現在	日本看護科学学会			
2. 2021年4月～現在	武庫川女子大学まちの保健室プロジェクトメンバー 渉外・広報・庶務担当			

学会及び社会における活動等

年月日	事項
6. 研究費の取得状況	
3. 2021年4月～2022年3月	International Family Nursing Association
4. 2015年5月17日～現在	日本小児看護学会